

復刻版

前期 女人芸術

発行年：1923年7・8月

全1巻

「友と二人の雑誌は生れることになった。

女人は三界に家なしと

——私は今こそ心の住家を得た心地がする。」

(長谷川時雨)

才溢れるあまたの女性作家を輩出した
雑誌『女人芸術』創刊前に刊行された、
長谷川時雨・岡田八千代による
幻の同人雑誌『前期 女人芸術』
全2冊を完全復刻！



定価●10,000円＋税(税込11,000円)

体裁●A5判・上製・総154ページ

解説●尾形明子

六花出版

戦前期の女性解放・地位向上へつながる、自己表現を
あきらめなかった女性作家2人による原点としての1冊！

戦前女性文学の礎を築き上げた 文芸雑誌『女人芸術』の前身誌

七兵衛（白く笑ふ）わたくしの價打ちはこれでございます。（家の縁賃を見せる）
中畑（感然として）さうなら、丈夫でおくらし。
七兵衛（左様よ！）
見詰めてゐた縁賃を無意識に腰袋に入れ、気がついたやうに大座敷の扉口へと進入して行く。

省線の下の方から出て来た女二人男一人、美しい方の女が、可愛らしい召使らしい女に、
「ではね、私先きへ歸るから、お前好い加減の時に歸つて来て頂戴、上手にね。」
召使はニコッと笑つてうなづいた、美しいのは男の顔を一瞥見して、一寸残り惜しさうにしたが、四邊の人を見ると、急に澄した顔になつてつか／＼と出て行つた、店の若い番頭らしい男と可愛らしい召使とが顔を見合せた。

大きな荷物を持つた田舎の女らしいのが、ステエソンの掃除婦に聞かせる。
「東京の……さんちう人は此處にゐますかね。」
「知りませんね。」
「わし、その人が此の脚で待つて居るちうので出て来ましたのだからね。」



宗十郎獲之助との「農民 甚兵衛」

帝劇と御園座との菊地寛兵衛の「農民甚兵衛」を見た、作者は、甚兵衛を愚か者として取り扱つて居られるやうであるが、舞臺に表はれた處の甚兵衛は決して全無馬鹿とは受けとれぬ處がある、殊に大詰の尋切近頃の甚兵衛の弟達に向つての白に「長い事甚兵衛をいぢめ

劇評

てくれて有難う」と皮肉を言つたり、弟達の首を斬られるのを見て、あゝ胸が透いた」といふやうな事を言はしてゐるのは、馬鹿の言ひ草とは思はれぬ。又「農民甚兵衛」と作者が筆を打つたのもよく通つてゐないと思ふ。然し、「孝の屋敷」でも見せやうとしたやうな此作者の作物の色の一部である世の中はかうしたものだといふやうな皮肉な笑ひは出てゐる。只庄屋の家の場



長谷川時雨 (1879~1941年)【右】

劇作家、小説家、初の女流歌舞伎作家。

雑誌『女人芸術』、機関紙『輝く』主宰として女性作家進出に大きな役割を果たす。

代表作に劇作「花王丸」「江島生島」、回想録「旧聞日本橋」、女性たちの評伝『美人伝』『近代美人伝』がある。

岡田八千代 (1883~1962年)【左】

劇作家、演劇評論家、小説家。

児童劇団・芽生座、女性劇作家の育成を目的とした日本女流演劇作家会を創設。

代表作に戯曲「黄楊の櫛」がある。

見るまゝに思ふまゝに

六月、七月
大阪文藝の人情形が来たので見物にいつてこんなことを考へた。無表情な、鏡のない、青ぶくれの顔が好きだ。この女形人形についてさう思つた。吉田文五郎の思ふ通りに人形が生て来る、死んで居る顔、血の気がさしてくる。眼が輝きやうなでく。胸が波立つて動もきこえる。肩が小刻みに顫てる。床の太夫が世態人情の痛苦を繰り切々と、哀管を振絞つて涙を流す。人形は涙を流し、聲なき怨もつて指寄つてくる。至極といはふか、技の極致といはふかしかしながら義太夫師がなかつたら、どんなものになるか？
時として人形は、ガテと胸があつたやうに、人形同士の人情が火死のやうに美しくきらめいて見える時が

ある。實感がともなはないだけに人間同士より遠慮がなくてやりよい場合があるのかも知れない。但し、あの綿々としてつきぬ怨みを掻きまくと、濃厚な情りものには適しても、命を投げつけて、短かき歡樂を讃美した江戸調のものにはとても適さない。と、そんな風にも思へた。或は昔日から誰人も考へつくし、思ひつくしたことであらうかも知れないが……
人形そのものから言つても動きのあるものの方が重いのであらうが、文五郎は菅原の千代と、忠臣蔵八段目進行の小説と、堀河のお俊とを見せてくれたが、寺小屋での千代は實に凄愴がきいてゐた。よいかたも見せた。然しながらわたしは進行の小説を推薦する。これははじめで見るとはいいないが、いかにもあどけな

*表示価格はすべて税別。

